

## 4 成功したときだけでなく 失敗したときも

前の節の例と似ていますが、テストで一〇〇点を取ったときはほめられるのに、それ以外の点数だったときに、あまり関心を示されなかったらどうでしょう。よい点数を取れば、「さすがだねえ」「たいしたもんだねえ」「いやあ、立派立派！」とほめられますが、その他の場合には、声をかけられなかったらどうでしょう。

期待されていた子どもが、陸上大会で入賞を逃してしまいました。でも、入賞しなかったからと言って、まるで大会そのものがなかったかのように話題にしなかったらどうでしょう。また、口では「頑張ったから、いいよ、いいよ」と言葉はやさしくても、さらっと言われたらどうでしょう。

私がかつて担任したたつや君（小六）は、テストで一〇〇点以外を取ると破り捨てようと思いました。私が、理由を尋ねると、「こんなの母さんに見せたら、クズだと思われる」と言いました。お母さんの口癖は、「人に負けてはいけない、何でも一位になれ」でした。彼が、運動会で一位になったり、絵画で入賞したりするみたいそう喜んでくれるそうです。

普段は、自信過剰なくらいな彼が、なんだかとてもかわいらしくも少し不憫に思えたことを憶え

ています。

成功したときだけほめられていると、望ましい結果を得たときだけ、自分に価値があると思ってしまうことがあります。つまり、失敗する自分には価値がないと感じてしまうのです。これは、「結果のみへの注目」と同じです。人生は望ましい結果だけを受け取り続けることはできません。こうした感じ方をしていると、どんどん自信が失われていきます。

したがって望ましい結果が得られなかったときにもそれに向き合います。そして、次につながることを探し出します。

「先生、一〇〇点取れなかった……」

と子どもが意気消沈していたら、どう声をかけますか。私なら次のように声をかけます。

「そうか、残念なの？（うなづく子ども）でも、一〇〇点取れなくて残念に思っているっていうことは、一〇〇点を取りたいと思っている証拠でしょ。その気持ちがあつたら次は取れるかもしれないよ。少なくとも、残念に思わない人よりもずっと可能性はあるね」

これは先ほど示した、一〇〇点を取ろうとした姿勢に注目した声かけです。小学校の先生だったら、学習中の取り組みを見ているわけですから「でも、授業中よく頑張っていたじゃないか」「だんだんと点数がよくなってきたよ」などと過程に注目した声をかけることができるはずです。

しかし、このとおりに言葉をかけることが大事だとは思っていません。ここで言いたいのは、失敗したときにも、子どもの積極的な面を見つけ出してそこに注目しようということです。

さらに重要なことは、

## 失敗したときにも受け入れられる

ことです。子どもが失敗して自分の価値を見失いがちになっているときに、そこに積極的な意味を見出して子どもに知らせるのです。子どもは失敗した自分を受け入れられることで、不完全な自分を受け入れられるようになります。

不完全な自分を受け入れることで、子どもが向上心を失うのではと心配する人もいるかもしれませんが、でも、みなさん自分自身に置き換えてみてください。自分の短所から目をそらしていて、本当に自分に自信が持てますか。本当の意味で自分に自信を持つことができるのは、ダメな自分を受け入れ、許せたときではないでしょうか。結果のみを重視する子どもは、ダメな自分を受け入れられないのです。そのような子どもが自分を受け入れるようになるためには、まず、ダメな自分を人から受け入れられることが必要なのです。

### ★ 自信を引き出す教師への道 ④

- ① 子どもが何か失敗したときのことを思い出してみてください。
- ② 子どもがその失敗に意味を見出し、やる気になるような声かけを考えてみましょう。